

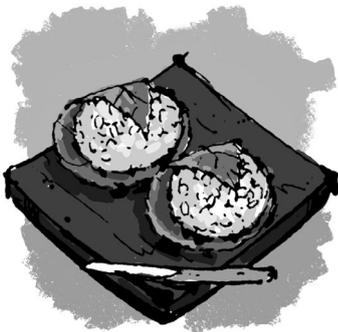
人の一生、事業経営、世の中の動きも、山あり谷あり。平坦、平凡、順風な道行ばかりではありません。幸福と不幸は表裏をなし、螺旋のように交互にやってくる、そんな人の世のあり様を表わした「人間万事塞翁が馬」という故事成語があります。これは、中国の古代の思想をまとめた書物である『淮南子』の「塞翁馬」という話のもとになっています。

▼ 国境の砦（塞）の近くに、老人が住んでいました。ある時、老人の飼っていた馬が隣の国に逃げてしまい、近所の人々は同情し、気の毒に思って慰めました。

しかし、老人は「このことが幸運を呼ぶかもしれない」と言いました。そしてその通りに、しばらく経つと、逃げた馬が立派な馬を連れて帰ってきたのです。

近所の人々は祝福してくれましたが、老人は「このことが不幸を引き起こす原因になるかもしれない」と言いました。老人の家は、良馬が増えたのですが、乗馬を好む老人の息子がその馬に乗り、足の骨を折る怪我をしたのです。

近所の人々は見舞いましたが、老人はまた「このことが幸運を呼ぶかもしれない」と言いました。一年して隣の国が大軍で砦に攻め入ってきました。若者は戦争に駆り出され、十人のうち九人が戦死しましたが、老人の息子は足の怪我のおかげで戦争に駆り出されず命を落とさずにすみました。



出来事を大らかな心で受け止め 今できることに丁寧に取り組む

この故事では、「禍（わざわい）」が「福」に、「福」が「禍」となる変転の様が、馬や息子の事例を用いて描かれています。企業経営も、失敗し、成功し、失敗し、成功するといったような、波動、リズムをなして進展します。重要なことは、良い時に奢らず、悪い時に落胆し過ぎないということでしょう。失敗したときは、之を喜んで受入れ、喜んで見つめると、立派な宝玉を拾い出すことができます。成功したときは、有難くこれをおし頂き、つつしんでおごらぬようにしておれば、またそこに良き教訓が得られる。失敗はつねに成功とつながり、成功をバツクにして存在するのである。

*「生きる道」丸山竹秋著 二〇〇頁

このように心がけていけば、たとえ、一時、成功の余韻に酔いしれたとしても、すぐに気を引き締めて、次の一手を打ち、思いがけぬ不運に見舞われた時でも、素早く気を取り直して立ち上がるができます。起こりうる出来事そのものは単なる事実であり、事のよし悪しを決めているのは、結局は自分自身に他なりません。日々生起する問題、課題に対しても、逃げず、腐らず、「ここにも『福』があるかもしれない」といった大らかな心で受け止めてみましょう。そして、軽やかな気持ちで、今、対処できることに真剣に、丁寧に取り組むたいものです。解決の糸口とは、こうした取り組みの先に見いだせるものではないでしょうか。